



吉木と今吉田の境に四辻という峠があります。この峠は吉木と広島方面を結ぶ道で、昔から四辻きつねと呼ばれるきつねが住んでいて、旅人にいたずらをして困らせていました。

秋祭りの夜、村人が提灯で、道を照らし
お土産にもらったお寿司を持って
この四辻峠を通ると、松林の辺りから
「コンコン、コンコン」
ときつねの鳴き声がありました。
(四辻きつねが出たな。用心用心)
と村人は大事なお寿司を盗られないように
小脇にしっかり抱え込みました。すると、持っていた提灯が消えて真っ暗になってしまいました。寿司を下に置いて火打ち石で提灯に灯りをとると、寿司がいつの間になくなっていました。



また別の村人は町で魚を買い四辻峠を通ると、前の方に見たことのない美しい女の人が現れました。女の人は、村人を手招きをして呼び、近くにある自分の家へ招きました。

お風呂に入るよう勧められ、ますますうれしくなった村人は言われるままに着物を脱いで
温かい湯船に体を沈めました。

「おおーいい湯だなー。」

とすっかりいい気分になりました。

でも、本当はそれは肥溜めの中でした。

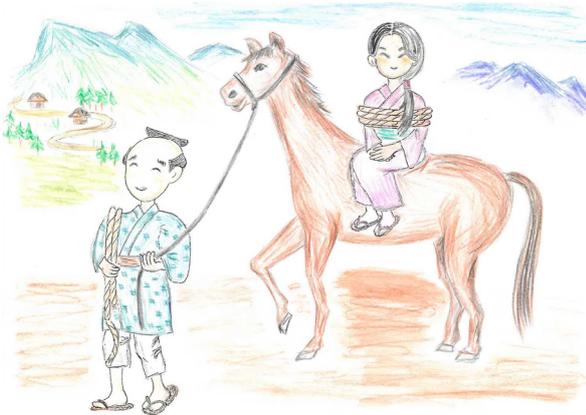
そこへ奥さんが来て、驚いてあわてて亭主
を引き上げました。



ある時、七曲に住む市兵衛さんは、四辻きつねが悪さをするので懲らしめてやろうと思
いました。きつねの好きな稲荷ずしを腰にぶら下げ馬を曳いて四辻峠を通りました。

すると美しい娘が出てきて

「すみません、長笹まで帰りたいので乗せてもらえませんか。」



と頼んできました。市兵衛さんは心の中で

（四辻きつねめ、出たな）と思いましたが

「いいですよ、どうぞ」

と言って乗せました。それから、

「もしも馬から落ちたら危ないですから。」

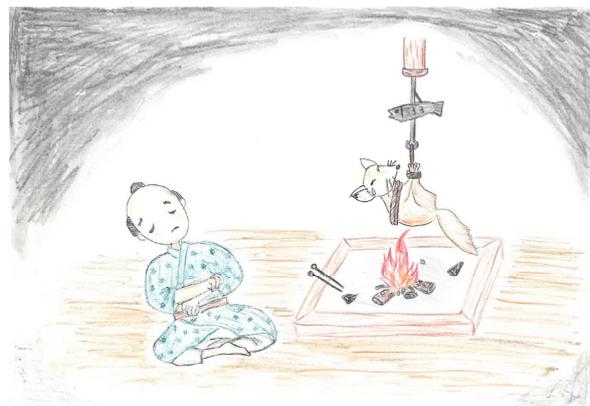
と言って用意しておいた縄でその娘を縛りま
した。

家について縛ったまま下ろすと、囲炉裏の上に置いて下から火を焚き始めました。

「ギャーあっちー。」

と娘に化けていたきつねは、たまらず正体
を現し

「すみません、私は四辻きつねです。今ま
でたくさんイタズラしてきました。もう二度
としませんから、どうぞお許してください。」



と必死に謝ったので、市兵衛さんはきつねがかわいそうになり許してやることにしました。
きつねはすっかり心を改め市兵衛さんの農作業を手伝うようになり、いつまでも仲良く暮ら
しました。

